
逆幽霊

t e t u

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆幽霊

【Nコード】

N4201Y

【作者名】

t e t u

【あらすじ】

自他共に勉強魔だと認める優等生の少女、風山花梨は、小学生における最後の夏休みを叔母の家で過ごすことにする。花梨は、夏休みのほとんどの日に忙しく活動をしていたが、そこでは土地勘が働かず、友達にも会えず、とどのつまり退屈の極みであった。

しかし、花梨は訪れたチャンス逃さなかった。成り行きで助けてもらった2つ年上の女性に、お礼をするために再び会いに行ったのだ。自分とは正反対の性質を持つ彼女に花梨は多大な好奇心を抱き、残りの日々を、彼女を研究するために、そして親交を深めるた

めに費やすことに決める。

ちょっとしたブローグ

五歳のときのある日。私は友達と一緒に、小さな公園の隅にある小さな砂場にて遊んでいた。日が暮れると、二人は仲良く同じ道を歩いて帰った。

「明日も、同じ場所で遊ぼうね」

別れ際に友達と言った。私は戸惑いながらも頷いた。

夜になると、私は鉛筆とノートを取り出して計算を始めた。もちろん地球は自転と公転をしている。今日と同じ場所って何処なのだろう。分かるはずもない答えを、私はいつまでも探し続けていた。そう、おそらくは今も。

1 夏休みの終わりと溺れた少女

夏休みが終わっちゃった。

陽射しの強い空の下。花梨は川の水に素足をさらしながら、考えても仕方のないことを考えつづけていた。すでに盆が終わり、八月の残り日数もわずか。これでは、いつもと変わらないじゃないか。小学校における最後の夏休みだというのに。

休みが始まる少し前、花梨は先制攻撃をしかけた。両親の目のまえで、その年の夏休みを最高に充実したものにしてみせると、高らかに宣言したのだ。そして、花梨は自分なりの価値観を持って、それを実行に移した。その広く自由な時間を使い、やりたいことをやる限りおこなった。それまでの休みの間に、およそ六十冊の本を図書館で借りてきて読んだ。友達と一緒に計画をたて、四度、遠くまで出かけた。子供のために用意されたPC学習プログラムなど、さまざまなイベントに参加した。

一日とて無駄な日を過ごさなかったはずだ。大きく目をひらいて、時間という時間を強く意識した。自らのやりたいことを次々と実行に移した。自分を見張り戒めるための空想の妖精を、いつも肩の上に乗せていた。

なのに、どうしたことだろう？ 妖精は一度も頼をつねらなかった。そうさせるチャンスにあたえなかったのだ。なのに、なのに……、花梨は、例年と同じように夏休みの終わりを嘆いているのだ。

もっと悔いの残らぬよう毎日を過ごすべきだった。もっと厳しい妖精を、しもべにすべきだった。もっとやりたいことを、やるべきだった。花梨は、そう思った、というより、そう思う他になかった。でも、具体的には何がいけなかったのだろう。花梨には答えがだせなかった。自分が満足していないという気持ちは明白であるのに対し、それを打破するための方法は、まるっきり見えてこなかった。

花梨は不安な気持ちに陥っていた。それに不思議でもあった。それまでにないほどの意欲を持って挑んだ夏休みだったのにも関わらず、その空しさが、むしろ、例年の休みよりも大きいものに感じられたのだ。なぜ……？ これは、頑張りと達成感が比例するという花梨が知っている公式に反するものだった。

胸の内にそんなことを秘めながら、その日の花梨は、ある人の手解きを受けながら、初の魚釣りに勤しんでいた。もちろんこれも、夏休み充実計画の一環だ。前々から、ぜひ挑戦してみたいと考えていたのだ。一匹でも魚を釣り上げ、その手ごたえを感じさえすれば、きっと空しさも消えてしまうに違いない。花梨は、そう信じていたし、信じたかった。

ただ、それまでのところ釣果はゼロだった。そして、このまま続けても、それは変わらないように思えた。座っている花梨の傍らには、水だけがたつぷりと入ったバケツが置いてあり、それが何とも嫌らしかった。一時間前の自分は、何故あんなに浮かれ張り切って釣れもしない魚のために水を汲んだのだろうか。どうしたって、そういう気持ちの方が浮んでくるのだ。

バケツが倒れた。

むろん、いくらか不安定な場所に置いていたとはいえ、水の入ったバケツが勝手に倒れるわけがないので、気づかぬうちに花梨が引っ掛けたのだろう。無気力状態になっていたので、触覚さえも薄れていたのかもしれない。それぐらいの気だるさが、花梨を包んでいたのだ。じっさい、バケツが倒れたとき、花梨はそれに気がつかなかった。しかし、バケツから水が流れ出て、それがズボンを濡らしたときには、さすがに気づかないわけにはいかなかった。汲んだときには氷のように冷たかった水だが、二時間もたったその時には、当然ぬるま湯になっていた。花梨は立ち上がって、お尻の半ズボンの被害状況を確認した。それから中身が無くなったために転がっていきそうだったバケツを、転がっていくまえに捕まえた。

「気をつけて。バケツと一緒に落っこちないでよ」

花梨に注意を促したのは、花梨の叔母であつた。さっぱり釣果のあがない素敵な釣りのやり方を教えてくれたのは、何を隠そうこの叔母である。叔母はゆつたりと岩の上に座つて、自分の竿を握り続けていた。

身も蓋もない説明をしてしまうと、花梨の叔母は異邦人だつた。

二十年ほど前に、とある理由で日本にやって来て、それからずっとこの国（もちろん、日本）で暮らしていた。やや、ぽっちゃりとした体型で、背丈は160ぐらい。アーモンド色の髪は、あごにかかるとぐらいの長さ。そのときには見る事ができなかったけど、瞳は深い緑色だ。叔母は、日差しに対抗するために、黒いサングラスをかけていたのだ。

「あらあら。ついに降参かしら？」

立ち上がつて竿を放り投げた花梨に対して、叔母が訊いた。釣果がゼロなのは叔母も同じだが、それが当然だと言わんばかりに大人の落ち着きをみせている。しかし、そういった大人の素振りには、往々にして苛立つた子供をさらに苛立たせるものだ。

「そりゃあね。私がやりたいのは魚釣りであつて、竿を持つことじゃないし」

花梨は、虚空をみつめながら皮肉を口にした。叔母は、ごめんなさいねと小さく詫び、それから少し間を置いて、この前に来たときは釣れたんだけどね、と言いつつするように付け加えた。どうやら叔母は、魚が釣れないという理由だけで、花梨が怒っているのだと考えているようだった。

そして、さらに十分ほどの時間が経つと、叔母は、仕事と夕食とペットのために、家に戻るつもりだと言つた。もともとそういう手はずだったのだ。当然、花梨はそれを拒むことはできず、またまた不満が募つた。花梨は、自分はどうしようかと少し迷つたが、諦めることができず、一人で釣りを続けることにした。しかし、叔母がいなくなれば、ますます退屈になるだろう。花梨は、愚痴の一つでも言わなきゃ収まらない気分になつた。

「あーあ。リラ叔母さんが、何かもう少し工夫してくればよかったのに」

「そんなこと言われても、私は素人同然なんだから、これ以上に良いやり方も場所も知らないわ」

「そうじゃなくて……たとえば、釣りをしながら、お喋りをするとかさあ。叔母さん、ずっと黙りっぱなしなんだもん」

「ああ、そういうこと。でも、あんまり騒がしくすると魚が逃げちゃうかもしれないでしょ？」

「そりゃ、そうだけどさ……」

「やれやれ、仕方ないわね。いまからでもいいなら、一つ目がさめるような、お話をしてあげましょうか？」

「うん。してして」

花梨は、期待して身を乗りだした。というよりは期待しているようなポーズをとった。

「この川はね、人を一人殺してるのよ」

「それって、誰かがこの川で溺れたってこと？」

そう尋ねると叔母はコクリと頷いた。花梨は、目の前に広がる川をみて、確かに死者がでて不思議ではないなと思った。その川は、確かにそんな条件を兼ね備えている。水温は低いし、白い飛沫がたつぐらいのスピードがある。幅は六、七メートルとそれほどないが、本当に流されてしまえば、そんなことは、あまり関係がないだろう。

「もう十年ぐらい前になるかな……」叔母は、大人が昔を語るときはいつもそうするように、しみじみと、懐かしむような声で話した。「近所に住んでいる人が、私にも知らせてくれたわ。一人の女の子が、この川の少し下流で死体になって出てきたって。みつかったときには、もう無茶苦茶になっていたそうよ」

「かわいそう」

花梨は、流され続けた死体がどんなふうになるのか知らなかったが、きつと酷いことになるんだろうなと思った。

「ええ。だから、あなたは同じ轍を踏まないようにね」

うん、分かった、と殊勝に答えながらも、花梨は自分が溺れることなんて絶対にないと確信していた。なぜなら、花梨は泳げないからだ。泳げないから泳がない。泳がないから溺れない。サーファーが登山家よりもたくさん溺れてるなんてことは、統計をとらなくたって、はつきりしてる。

「じゃあ、私は先に帰るわね。あなたも日が沈むまでには戻ってきなさい」

叔母は、そう言って去っていった。一応、信頼してくれてるんだなと思い、うれしくなった。叔母は少し過保護なところがあり、ともすれば、一人きりにさせてくれないのではないかと思っていたからだ。花梨は年齢のわりに背が低いので周りからは幼くみられ、そういう扱いを受けやすかった。

残された花梨は、溺れてしまったという子について少しだけ想いを巡らせた。叔母は、その子が溺れた理由について何も言及しなかったが、話の流れから考えれば事故だったに違いない。彼女は、死ぬ間際に何を思ったのだろうか？ 彼女には、何かやり残したことがあったのだろうか？

どうでもいいや。と花梨は考えるのをやめた。どのみち死んでしまった人、それも何年も前のことだ。彼女は、もう何も話せないし、何もできない。何かやり残したことがあったにせよ、もう叶いはしない。化けて出るといふのなら話は違うが、それも幽霊が実在すればという話だ。

幽霊なんて絶対にいない。そう公言してしまうほど花梨は横着ではなかった。とはいえ、幽霊が自分の前に現れたらどうしようなどと、取り越し苦労をするようなタイプでもなかった。幽霊なんて自分には何の関係もない。そう考えるのは、いかにも自然なことであり、いたって普通の考えであるよう思えた。

2 あっという間の出来事

確かに夏休みは、終わってしまった。最高の夏休みを過ごしたとも思えない。でも、じたばたしたって仕方ない。

いつまでもグジグジしているほど、花梨は後ろ向きな性格ではなかった。氷水のように冷たい川の水で顔を洗い、すぐさま気持ちを切り替える。

良い方に考えよう。何もできなかったわけじゃない。今年は今年で、意義のある夏休みだった。特に、知識面の向上は、自分でも実感できるほど大きかった。やり遂げられたことも少なからずあるし、新しくできるようになったこともある。もっと言えば、まだ夏休みが全て終わってしまったわけじゃないのだ。

「よし！」

花梨は、転がしてあった竹竿を拾った。焦りや苛立ちが無くなった今ならば、魚が掛かるような気がしたのだ。ともあれ、試してみようと思った。

両手で竿を握り、背負い投げを決める柔道選手のように竿を振った。気持ちを込めた一振りだった。しかし、あるいはその気持ちがいけなかった。餌のついた針が、川に落ちることはなかった。

「えっ、なんで!？」

すぐさま、最悪の事態に陥っていることを知る。後ろを振り返ると、釣竿の糸が大木の枝に引っかかっていたのだ。ゆっくりと竿を引き、糸を引っ張る。するりと解けてくれれば良いものの、そんな奇跡のようなことは、もちろん起こらない。どうやら、厄介なことになったらしい。

「ちよつと、もう。勘弁してよー」

花梨は、木や糸と格闘するはめになった。もう一度、角度を変えて引っ張ってみたり、折れ枝を探してきて突っついてみたり、石を投げてみたり、木に頼んでみたり、ありとあらゆる手段を試みてみ

たが、糸は解けなかった。

五分もすると、花梨は自分の力ではどうにもならないことを悟った。しかし、だからと言って叔母を呼んでくるのも癪だった。叔母は、花梨のことを悪く言わないだろうが、心の中では、花梨のことをまだまだ子供だな、と思うに違いない。

諦めきれずに、折れ枝を持って何度も何度も跳躍しているときだ。後方から誰かの声が聞こえた。振り返ると、川の対岸で一人の女性が口を押さえて笑っている。それも、人を不愉快にさせるような嘲り笑いだった。ともすれば、指差しでもしそうだ。

「なにが可笑しいのよ？」

花梨は、少し非難の気持ちを込めて言った。人が必死になって頑張っているのに、それをみて笑うだなんて失礼にもほどがある。

「だってさあ……」対岸の女性は、氣取った感じの声（しかも大声と両立している）で言った。「あなたみたいなマヌケは久々にみたもの。蛙みたいにピョコピョコ跳んで面白いたらありやしない。無理に決まってるじゃない。そんな小さい生りで。あなたみたいに極端なチビだと苦労するんでしょうね。自動販売機の上のボタン、押せないんじゃないの？」

ひどい言い草だった。花梨は、自分の身長のことを気にしていたので、なおさら頭に血が昇った。言われっぱなしでは、腹の虫が治まらないので、花梨も何か言い返すことにする。

「言っておくけど、蛙のショーはお終いよ。もうわたしは跳ばないんだから。それから、あなたは、わたしの身形をバカにしたけど……」花梨は言葉を紡ぎながらも、視力検査でA判定をもらった両眼で、彼女を観察した。「あなたは、背丈に対して痩せすぎなんじゃない？　まるでモヤシみたい。海上で船が沈んで遭難したら、まっさきに死ぬタイプね。顔色が悪いし、感じはそれ以上に悪い。みているだけで不愉快だわ。さっさと消えて」

「言われなくなつて、そのうち消えるわよ」

彼女が急に真顔になって言ったので花梨はドギマギした。言い過

ぎたかもしれないと思ったのだ。いいや、お互い様だ。気にすることはない。

「だけど困ってるようだから、助けてあげようかなって考えているんだけど。私の身長なら、とどくかもしれないでしょ？」

意外な申し出だった。だけど、花梨は油断しなかった。もしかすると、助けてあげようと考えただけで助けない、なんてオチが待っているかもしれない。

「別に助けなんていらない」

「意地っ張りね。その竿、自分の物じゃないんでしょ。違う？ 人が助けてあげるって言ってんだから、素直に受け入れなさい」

どうも、彼女の方は本気らしかった。花梨は、少しだけ考えた。

この人に手伝ってもらえば、何事もなかったかのように、叔母に竿を返すことができるかもしれない。手伝ってくれると言っている以上、解決できる自信があるのだろう。だけど、一つ問題がある。

「でも、どのみち、こっちに來られないでしょ？ わざわざ、回り道をしてまで来てくれるの？」

そう。二人の間には、川があった。ゆうに六、七メートルはあるだろう。足場の条件も悪く、濡れずに渡ることなど、走り幅跳びのメダリストだってでやしない。上流か下流に行つて渡れる橋でも探せば済むことだが、少なくとも花梨の視認できる範囲にはそんなものはなかった。何処まで行けばいいのかは、検討もつかない。

花梨は、女性の顔をみつめた。すると彼女は、うつすらと笑みを浮かべた。それから、一步、二歩と川に歩みよった。

「え？ ちょっと……」

どうやら、川を渡るつもりらしかった。確かに彼女は手ぶらで、濡れて困るような物は持つてはいないものの、服や靴と、それから一番大事なものであるう生身の体を持つているのだ。

「あのさ。いいよ、そこまでしてくれなくても。自分で何とかするから」

「バカね。何とかできそうにないから、手伝つてあげるって言つて

んのよ」

少しの躊躇いもみせないまま、女性は靴を履いたまま足を水の中に踏み入れた。だが、もう片方の足は、なかなか踏み入れなかった。水が予想以上に冷たかったからだろう。花梨も、初めて川の水に触れたときは、その冷たさに驚いたものだ。

しかし、彼女は引き返さなかった。一瞬、留まったものの、徐々に足を踏み入れていき川に侵入していく。次第に沈み込んでゆく彼女のことを、花梨は、ドキドキしながらみていた。川の水が、さつきよりも激しく流れているようにみえた。

川の半ばほどで、すでに立ち泳ぎの状態になった彼女が、少し動きを止めたようにみえた。ついに頭が隠れてしまい、花梨は思わず慌てふためいた。大声で彼女に呼びかけると、彼女は川から顔を出した。

彼女は無事に川を渡りきった。花梨は彼女が陸にあがるのをみて、ようやく胸を撫で下ろすことができた。彼女が川を渡っている時間は三十秒足らずだったのだろうが、その間、花梨は気が気ではなかった。

「あんまり無茶なことをしないでよ。こっちまで、ヒヤヒヤしたじやない。……そりゃあ、そっちは文字通りヒヤヒヤしたんだろうけどさ」

川渡りという偉業を成し遂げた彼女は、花梨の言葉には答えず、犬のように首を振って水を飛ばし、髪を揺らした。彼女の髪は、ずいぶん長かった。それから対岸にいたときに花梨が罵倒したように、彼女の痩せ具合は相当なものだった。手の甲を観ると、ほねが薄っすらと浮き上がって見える。

「さあて。ちよっと、私でも届かないかな？」

彼女は、何事もなかったかのように、早速、木に絡まってしまった系の件にうつった。爪先立ちになり、腕を思いっきり伸ばしてジャンプした。高さは足りているようにも見えたが、彼女は手を引っ込めた。

「だめね。ここからだによく分からないけど、多分、針が枝にくい込んで。どうせ、誰かさんが考えもなしに糸を引っ張った所為でしょうけど」

「何よ、それ。また、私のことをバカにしたわね？」

「あなたじゃなくて、あなたの行動をバカにしたんだけど」

「ほとんど同じことじゃない」

「ほとんど同じは、違うの一部よ」

五秒ほど考えて、それはそうだな、と花梨は思った。もちろん、そんなことは新発見でも何でもなし。だけど、何となく、そんな気持ちになったのは何故だろう？

「えっと、それは、まあいいんだけど、もうお手上げってことなの？」

彼女は、腕を組み黙り込んだ。おそらくは、次の作戦を考えているのだろう。親身になって考えてくれているという点で、花梨は嬉しかった。だけど同時に、すぐにでも帰って欲しいという気持ちもあった。あるいは、彼女をリラ叔母さんの家まで連れて行きたかった。本当は彼女だって、はやく帰って熱いシャワーを浴びたいに違いない。

「あつ、そうだ。肩車をすればどう？」

花梨は、自分の閃きを、すぐさま口に出した。肩車をしても、単純に二人の身長が足し算されるわけではないが、枝に届くぐらいの高さには確実になるはずだ。

「そうね、それならとどくもしれない。だけど……」

「だけど？」

「あまり気が進まない」

「なによ？ 私を担ぐのがそんなに嫌？」

「そうじゃなくてさ……」 彼女は、地面に爪先をコンコンぶつけながら言った。「私、肩車なんて一度もやったことがないから。上手くできるかどうか自信がないの」

「なんだ、そんなこと。わたし、そんなに重くないから大丈夫よ。」

痩せ型ではないけど、体重そのものはクラスで一番、軽いもの」

「きつと脳みそも、一番、軽いんじゃないの？」

「肩車してくれるの？ してくれないの？」

花梨は、彼女を早く帰してあげるためにも、彼女の口の悪さに付き合わなかった。彼女は、少し渋ったものの、結局は、花梨を上に乗せることに同意した。二人は、抛り所にするために、大きな木のそばに寄った。

「ほら、乗るなら早く乗んなさい」

彼女は、柔らかそうな髪を、邪魔にならないように揃えてからしやがんだ。花梨の方も、ためらいがないわけでもなかった。花梨もまた肩車されたことがなかったからだ。どうやって、バランスをとればいいのか分からない。初めて自転車に乗ったときのように、大きく転んでしまうのではないか。そう思うと、ちょっぴり不安だった。

だけど、やってみるしかない。花梨は、女性の濡れている肩に足をかけて跨った。眼前にある大木に手をあてて心理的な支えにした。「いいよ。ゆっくり上げて」

花梨の体が、少しずつ持ち上げられていった。視線が徐々に高くなっていき、着席するときの視線、中腰になったときの視線、起立しているときの視線と、変化した。しかし、そこから先は未知の世界だった。花梨の視線は、自分の限界点を越え、さらに上昇を続けた。

空を飛んでいる気分だ。視界は、通常時より遥かに広く、ずっと遠くまで見渡せる。普通では考えられない角度で、下の世界を眺めることができる。

「ねえ、上、大丈夫？ 歩くよ？」

「うん。もうちょっとだけ、前に進んで」

彼女は、花梨の言う通りに動いた。目的の枝は、すぐそこにあった。下からでは見えなかった釣り糸の状態もよく分かった。枝に巻きつくようにして絡まっていたのだ。これでは、いくら引っ張った

ところで外れないわけだ。花梨は、急いで針を抜き、絡みついていた糸を取りはずした。

「やった、とれたよ！」

花梨は、針を地面に落とした。さんざん苦勞したこともあり、よろこびも大きかった。

「じゃあ、おろすわよ」

ゆっくりと高度が下がっていき、花梨は地上にもどされた。空を飛んでいた気分だったので、いつもの大地が、少し特別なものに感じられた。でも、この感覚は、すぐにでも消えてなくなるだろう。もう少し、空の旅を楽しみたかったが、そういうわけにもいかないか。

「あの、ありがとう」花梨は、礼を言った。「それから、さっきはごめんなさい。あなたのこと悪く言ったりして。本当は良い人だったのね」

「その言い方、まるで人を、善人と悪人に、きっぱり分けられると考えているみたいね」

「そんなつもりはないけど」

「だったら、勘違いされるような物言いをするのはやめなさい。元々、おバカなんでしょうけど、よりいっそうバカに思われるわよ」

「そっちも言葉には気をつけた方がいいよ。よりいっそう嫌われるだろうから」

「ふん。口だけは達者なのね。じゃあ、私はもう行くわ。誰かさんのおかげで、びしょ濡れになってしまったから」

「ありがと。本当に助かった」

花梨は、彼女の背中を見送った。すたすたと歩いていき、あつという間にいなくなってしまった。楽しい経験だったなど、花梨は思わなかった。初めて出会った人に対してあそこまで激しく言い争ったことはなかった。無論、彼女の口が原因だったのだろう。でも悪い気はしなかった。もしかしたら、田舎の人が特有で持つ美点なのかもしれないな、と花梨はなんとなく思った。

彼女の気配が完全に消えると、花梨は感傷もそこそこにして、釣り再開することにした。しかし、今度は必要以上に後ろを振り返って、慎重に竿を振るのであった。

3 一幅の絵

夕方の五時ごろ。花梨は、左手にバケツを下げ、右手に竹竿を持ち帰路についていた。結局のところ釣果はあがらなかったが、嫌な気分ではなかった。たぶん、困っていたところを助けてもらったからだろう。バケツは空っぽだったが、花梨の心は優しい気持ちでいっぱいだった。

ところで、花梨は帰るべき場所に真つ直ぐ向かっていたものの、その場所は自分の家ではなかった。今の花梨は自分の家には歩いて帰ることができない状況にあった。目指していたのは叔母の家だった。

叔母の家は、花梨の家から二十キロ以上も離れている。何かと騒がしい花梨の家の付近とは違い、静けさと自然に包まれた穏やかな田舎である。一応の交通機関があり、一応の道路がひかれているので完全無欠の田舎だとは言い難いが、ウグイスの歌や蛍の光を堪能できると考えれば、それなりのものであると言ってもいいだろう。何にせよ、緑に溢れているというのは、たいへん結構なことであった。

夏休み、冬休み、春休み。つまりは、まとまった休みになると、花梨はママと一緒に、というよりはママが花梨をつれて、叔母の家を訪れる。いつもは一日か二日ほど泊まり、その翌日には帰ることになるのだが、その夏は、花梨一人だけで、すでに四日間も滞在していた。花梨が提案して、それがあっさりと受諾されたのだ。

「じゃあ、わたしは一度、帰るわね。花梨、あんまり勉強ばかりやってちゃダメよ。叔母さんに、何か危ない遊びでも教えてもらいなさい」

ママは、そう言い残して去っていった。叔母はクスクスと笑い、そんなに勉強ばかりやっているのかと花梨に訊いた。じじつ勉強

魔である花梨は、否定することもできず、ぷうーと頬を膨らませるしかなかった。

叔母の家で寝泊りして四日間。予想通りに良かったこと悪かったこと、予想外に良かったこと悪かったことがそれぞれあった。しかし総合的にみれば、やはり残って良かったなと花梨は思った。理由は色々あるが、一番大きな理由は、叔母との親睦を深められたことだろう。

叔母は、花梨にとって大切な人であり、常に良い関係を保っていた人でもあった。彼女が花梨と同じものを持っているからだ。前にも簡単に述べたが、叔母は日本人ではなかった。カツラもコンタクトも無しに、髪はアーモンドのようなツヤのある茶色、瞳は深い緑色だった。花梨のママも同じような風貌だ。パパはちがう。日本人だからだ。だから花梨も半分だけ叔母やママと同じ特徴を備えていた。

叔母になら、何でも気軽に相談できた。容姿のせいで、クラスメイトにちよっかいをかけられていると悩みを打ち明けたこともある。すると叔母は、何も言い返さずにいるのが一番良くない、などの具体的なアドバイスを幾つかくれた。それらの助言の全てが功を奏したわけではないが、頼りにできる相手がいるという事実そのものが、花梨を勇気づけてくれていた。

もちろん、ママだって同じ条件を持っているし、相談するだけならパパや先生や友達にしても構わないはずであった。しかし、だんぜん頼りにしたいのは叔母なのである。叔母の方がママよりも常識人だったし、（ママには内緒だけど）頭が良さそうに思えた。

叔母は一人暮らしであったが、それもまた、花梨の関心を引く要因にもなった。叔母は、花梨が産まれる以前に、年長の配偶者を失い、未亡人となっていた。叔母の夫は、元々が病氣持ちだったらしく、当然、叔母には子供がいなかった。

しかし叔母は、最愛の人を失った後も祖国に帰らなかった。このことは花梨の運命をも大きく変えていた。というのは、叔母の姉、

つまり花梨のママを、日本にとどめさせる理由になったからである。叔母がもし祖国に帰っていたとしたら、花梨のママは日本で結婚することもなく、花梨は、エミリーとかステファニーとかいう名前になっていたかもしれないのだ。（生まれてこなかったと考えることもできるかもしれない）

叔母が日本を離れなかった理由は分らない。叔母に訊いても、はつきりとした答えが返ってこないのだ。ただ、一つには趣味のためなのではないかと花梨は踏んでいた。叔母は絵を描いたり観たりすることに多大な関心があり、特に四季折々の自然を愛しているようであった。また、変わったところでいえば、叔母は日本の漫画文化にも強い興味を持っていた。

叔母について記すべきことは、大体こんなものだ。続けることはできるが、その話は、ひとまずこのぐらいにしておくことにする。さもないと、話が一向に進まないからだ。ともかく、花梨は川で釣りを終えたあと、とことこと歩いて、叔母の家に帰ってきた。

花梨は、自分が帰ったことを叔母に伝えるために、やや大きめの声で、ただいまーと言いながら、木製の扉を引っ張って、家の中に入った。叔母の家はレストランみたいだ、と花梨はつねづね思っていた。玄関の戸を開けると小部屋があり、そこに傘立てが置いてあるのだ。そして、さらに奥に進むと、そこがダイニングなのである。そのダイニングに叔母はいた。およそ単身の人間には不釣り合いな巨大テーブルに右肘をつき、左側にいる花梨をちらりと見て、おかえりなさい、と言った。右半分が写真で占められている料理本を、気だるそうに眺めていた。もちろん、川原でしていたサングラスは外していて、柔らかな緑色の瞳を見ることができた。

「おかえりなさい。案外、早かったわね。道具は、その辺りに置いて頂戴。首尾はどうだった？」

それほど、興味がなさそうに、叔母は訊ねた。分かってはいるけど一応ね、といった感じだ。

「くたびれ損の骨折り儲けよ」花梨は、バケツと竿を床に置きなが

ら答えた。「こんなことなら、家の中でじつとしてるんだったな。長靴一つ釣れなかったもの」

「あら。そのわりには機嫌が良さそうね」

「まあね」

花梨は、部屋の左奥にある扉のない入口からキッチンに入った。

まず、流しで手を洗い、それから冷蔵庫を開けて麦茶を取り出した。それをコップになみなみと注ぎ、ちびちびと飲んだ。花梨は、体が小さいせいか、冷たいものを一気に飲むと、必ずお腹を壊す。だから冷たいものを飲むときは、胃にショックを与えないように少しずつ飲むことにしていた。

それから花梨は、シャワーを浴び、読みかけだったエッセイを読み終え、叔母の作った夕食（親子丼、味噌入れすぎ）を食べた。食後は、特にすることもなく、ただ熱いお茶をゆつくりと飲みながら、幸せな気分にあふれていた。昼間にはしゃいだせいなのか、少し眠気があった。そこで、ふと彼女のことを思い出した。

「そういえば、叔母さんが帰った後にね……」

花梨は、二時間ほどの前の出来事を叔母に話した。初めは、釣り糸を木の枝にひっかけてしまったことや、彼女が川に入ったことなどを黙っていたようかと思っただが、眠気のせいか面倒くさくなってしまって、結局は事実をそのまま話すことになった。叔母は表情一つ変えずに聞いていたが、ときどき聞き返すなどをして、関心がないわけでもなさそうだった。

「ほんと、おかしい人だったなあ。田舎の人って、みんなあんな風に話すものなの？」

「それは違うんじゃないかしら」

「あつ、やっぱり？ でも、ああいう話し方も悪くないと私は思ったな。そりゃあ、最初はイラつとしたけどさ。嫌いになれなかったもん」

「どうして？」

「どうしてって言われても。多分、新鮮だったからじゃないかなあ。

初対面だとしてもぎこちなくなっちゃって、楽しくお喋りできないでしょ。彼女と話しているとき、そういうのが全くなかったから」

「彼女ともう一度、会いたい？」

「うーん。どうかな。あつ、お茶をもう一杯もらえる？ そうね。うん。会えたらいいかな」

花梨は少しだけ、その状況を想定してみた。再開するや否や、彼女は何か言うだろう。“あつ、この前のチビ”、だとかなんとか言っ。そうなった場合、花梨も負けじとカウンターをするだろう。

“あつ、このまえのミイラ”とかなんとか言っ。そして、その後は、この前のお礼をする。“あら、何のことかしら”だとか彼女は言うだろう。その後は、どうするだろう？ どうにでもできるな、と花梨は思った。彼女のことを聞いてみるのもいい。まずは歳でも聞いてみようか？ 同い年ってことはないだろうけど、それほど差があるとも思えない。おそらくは中学生、あるいは高校生、そのどちらかに違いない。

「彼女の容姿を教えてください。人相書きを作ってあげるわ」

叔母は出し抜けにそう言っ。広告の束から裏面が白紙のものを一つ選んで抜き出し、それをテーブルに置いた。また、カベ掛けのカレンダーに横にひも付きでつけられていたメモ用の鉛筆をとった。「何をするの？」

「だから、人相書きよ。この前、テレビでみたの」

「そんなの作っでどうするの？ コピーしてばらまくつもり？」

「冗談でも、そんなことはしないわ。さあ、後ろを向いて」

「えー、なんで？」

「完成してから見た方が面白いでしょ。彼女の姿かたちを口頭で伝えて。私が絵を描くわ」

「口だけで？ いくら叔母さんでも、それは無理だと思うけど？」

「まあまあ、とにかく言うとおりにして」

突然の叔母の提案によっ。花梨は混乱させられていた。むろん叔

母が絵を得意としていることは承知している。だけど、口で伝えられることには限界がある。そもそも、花梨だって彼女の容姿を鮮明に思い描くことはできないのだ。

「ほらほら。後ろを向いて」

「ああ、もう。分かったってば」

なんのつもりかは分からなかったが、叔母は乗り気だった。花梨の座っている椅子の背を持って、くるりと反転させようとした。花梨は、湯飲みを置き、立ち上がって叔母にしたがった。

「じゃあ、始めて」

「何から話せばいいの？」

「何でもいいわよ。身長なり体重なり」

「ええと。身長は百六十前後かな。叔母さんより少し低いぐらい。びつくりするぐらい痩せてたわ。五十円を賭けてもいいけど、叔母さんより十キロは軽いわね」

「あら。それって私が太っているって意味かしら？」

「ううん。叔母さんはグラマーよ」

「そのとおり。じゃあ次は、顔立ちとヘアスタイルを教えて」

こんな感じで、花梨は次々と彼女の容姿を言葉だけで伝えていった。髪は長い、やや歯並びが悪い、服装がボーイッシュ、などと言葉を紡いでいくものの、はつきり言って、こんなやり方でまともな絵がかけるはずもなかった。痩せていると一口にいつても、人には千差万別の痩せ方があるはずだ。

しかし五分もすると叔母は、できたわ、と完成の宣言をした。それも自信満々の声であった。

「もうできたの？ 嘘でしょ？」

「本当よ、こんな感じでどうかしら？」

花梨は、叔母から広告用紙を受け取って、その裏面を見た。一秒安心して、その後に、呆れ笑いをしてしまった。

「もう、叔母さんったら。意地が悪いんだから」

「どうやら正解だったみたいね」

叔母の描いた絵は、彼女本人を知っていない限り、絶対に描けないものだった。それは腕を腰に当てて偉そうに見下している人の絵で、痩せ具合、目つき、鼻の形、口の形、髪の手、胸の膨らみ方、全体の姿勢、仕草、雰囲気、それら全てが彼女特有のものだった。さらにもう一ついえば、それは漫画のようにデフォルメされていて、かつ左横の空白に「バカね」と吹き出しが書き込まれていた。明らかに、叔母は彼女のことを知っていた。

「まったく。回りくどいやり方をするんだから。知ってるなら、知ってるって言えばいいのに」

「あの子であるという自信はあったけど、絶対ではないからね。一応、確認してみたのよ」

「叔母さんは彼女とどういう関係なの？」

「そうねえ。まあ一口で言えば、教師と生徒ってところかしら。最近は、めっきり交流が減ってるけど」

「英語を教えたの？」

「まあ、教えることもあったわね」

「ふーん」

きつと手のかかる生徒だったんだろうなーと、花梨は予想した。そもそも、あの彼女が誰かに教えを請う姿が想像できない。

「三坂怜亜って言うの、彼女」

「みさかれいあ」

花梨が復唱すると、叔母は、さつき描いた絵の下に漢字でフルネームを書き込んだ。

三坂怜亜、か。それらしいと言えば、それらしい名前かもしれないなと思った。“怜”の響きが何となく高慢っぽくて、その下に“亜”がつくのがいかにもそれっぽい。後ろについた文字が“花”や“奈”だったら、可愛げが出てしまっただろう。“亜”の場合、余計なものがつかず、混じりつけなしの高慢さが現れてる。

「彼女、どういう人なの？」

「口で説明するのは難しいわ。外見を説明するのと同じくらいね」

「人にはやらせておいて。大体の感じで構わないのだけど」

「あらあら。大体の感じなんて、あなたはもう知っているんじゃないかしら？」叔母は、優しい声で言った。「傲慢で口が悪くて、誰もかれをも見下している。でも根は優しく、とても良い子。それだけ知っていれば充分じゃないかしら？ あんまり勝手なことを言いたくないしね。彼女が聞いたら、きつと怒るでしょうから」

それはそうだな、と花梨は納得した。

「叔母さんは、彼女の住所、知ってるってことよね？」

「ええ。知っているけど。まさか、会いに行くつもり？」

「うん。ちゃんとしたお礼もしたいし。近所なんですよ？」

「そうねえ。五百メートルってどこかしら？ だけど住所より、先にこつちじゃないかしら？」

そついうと叔母は、置いてあつた手提げカバンの中から何かを取り出した。白くて四角い電子機器。折りたたみ式の携帯電話だった。

「叔母さん、そんないいものを持ってたんだ」

「つい最近、手に入れたの。あなたがここにいる間、貸してあげるわ」

「ほんとに？」

花梨は、内心飛び上がりたくなるほど喜んだ。それは花梨がいま一番、興味を持っているアイテムだった。自分のものじゃないから自由に使えるわけじゃないが、それでも嬉しいことには変わりはない。

「言つまでもないけど、大事に扱つてね」

「うん、ありがとう。大切にするよ。あつ、だけど知らない人から電話がかかってきたら、どうすればいいの？」

「言つたでしょ。つい最近、手に入れたばかりだつて。私の番号を持つてるのは、彼女と、あなたのママよ」

「あつ。なるほど。ていうか、あの人もケータイ持つてるんだ。ちよつと意外かも」

「使い方は分かる？」

「うん、大丈夫。ママのをいじったことがあるから。わあ、最高。夢みたい。……ねえ、早速、使ってもいい？」

「どうぞ、ご自由に」

花梨はテーブルの上の広告用紙をとって、じっくりと見つめた。その絵を見ると、なんだか彼女を身近な人に感じた。実際、携帯電話を手に入れた花梨にとって、彼女はもう遠い所にいる人物ではなかった。

「彼女にかけるつもり？」

「うん。いいでしょ？」

「もちろん構わないけど、先にあなたのママを使って、練習しておいた方がいいんじゃないかしら？」

「いいよ、別に。ママといつでも話せるんだし」

「よかつたら、私に取りついであげましょうか？ いきなりあなたの声がしたら、彼女もびっくりするでしょうから」

「大丈夫よ。上手にやるから。むしろ、びっくりさせてあげたいし。叔母さんってほんと過保護ね」

花梨は、ゆっくりと折りたたみ式の携帯電話を開いてみた。すると、画面やボタンが、まるで花梨を祝福するかのようにピカピカと輝いた。時計も内蔵されていて、十八時四十五分であることが分かった。

真ん中についているボタンを適当に押してみる。着信履歴が出てくる。ママの名前がずらりと並び、その一番下に、三坂怜亜の名前が乗っていた。カーソルを下に動かし、三坂怜亜という文字に合わせる。合わさった。あとはボタンを一つ押せば、もうつながる。

電話を持つ花梨の両手はカタカタと震えていた。眠気はとうに吹っ飛んでいた。不思議なものだ。新しいことをするときはいつだってドキドキする。おかしいものだ。新しいことをするのは、別に新しくないはずなのに。

気を静めるために大きな息を吐く。話す中身について考える。まずは、用件。お礼が言いたくて電話をかけたの、と言う。それから、

もう一つ。明日、会えないかと訊こう。お礼の品として、ケーキでも持っていくのはどうだろう？ うん、そうだ、それでいい。いきなり、こんなことをするのは失礼かな。ううん、大丈夫。まずは訊きただけだから。ダメだったらダメで、諦めるだけだ。あとは成り行きでなんとかなるだろう。

「よし」

花梨は勢いよく、ボタンを押した。叔母は、部屋を出て行き、花梨にエールを送るように手を振った。

4 花梨の交渉

コール音が鳴る。一回、二回、三回と。

花梨は、電話を耳に当て、今か今かと心待ちにしていた。部屋の中をぐるぐると歩き、靴の裏を擦り減らす。四回、五回、六回。彼女は、なかなかとってくれない。七、八、九。まだでない。

十と数回のコールを鳴らしたあと、花梨は、通話を切った。多分、お風呂にでも入っているのだろう。想定外ではあったが、当然、起こりうることである。

時間を置いてから、花梨は再び電話を掛けた。結果は同じ。さらに時間を置いてもう一度。またまた不通。

「どうだった？」

バスタオルを頭にかぶせた叔母が、花梨のいるダイニングに入ってきた。花梨は、両手と両肩を上げて、ダメだったという意味の仕草をとった。

「叔母さん、嘘をついたね」と花梨は、言った。「彼女が携帯電話を持っていてなんて真っ赤な嘘。だって……携帯してないもの」

「あらまあ、仕方ないわね。時間をおいて掛け直してみたら？」

「もう50回はコール音を鳴らしたんだけどね。まさか、着信があることを知っていて無視してるなんてことはないよね？」

「有り得ると思うわよ」叔母はさも当然のように言った。「多分、いま電話を握っているのが私じゃないってことに気づいているんじゃないかしら」

「どういうこと？ そんなこと彼女に分かるはずないでしょ？」

「あの子は、ときどき変に鋭いからね。あなたが昼間の出来事を私に話して、私が彼女だと察して、あなたが彼女に電話する。充分に想像できる範囲じゃないかしら」

「だってでも、叔母さんと私に関係があるってことでさえ、彼女は

知らないのよ？」

「それは推理するまでもなく分かることよ。私の家の近くで、私と似た瞳の色を持つ子供がいたら、普通はどう考えるかしら？」

「あっ」

そういえば彼女は叔母と知り合いだったのだ。ハーフなんて、そうたくさんいるものではない。つまり最初から花梨の素性はバレバレだったわけだ。花梨は、自分の頭の悪さと感の悪さに辟易した。

「じゃあ、私が叔母さんの姪っ子だったこと、彼女はもう知っているわけ？ 叔母さんは私のこと、彼女にどれぐらい話してるの？」

「そうねえ、どうだったかしら」叔母は顎に指を当てて俯いた。「姪がいるってことは話したかもしれないわね。でもまあ、逆に言えばそれぐらいよ」

そういうことは先に言っただけだったな、と花梨は思った。不意を打って彼女を驚かせてやろうと思っていたが、危うく独り相撲になるところだった。しかし、叔母との関係が知られているというのは、花梨にとっては都合がいいことだ。これでかなり気軽に話せるようになっただろう。……彼女が電話をとってくればの話だが。

花梨は、もう一度、電話をかけてみた。コールを十回。やはり、つながらない。

「まったくもう。信じられない人。何回、かけさせれば気がすむのよ」

「まあまあ。そんなにあの子を責めないであげて。きっと、あなたとお喋りするのが怖いんだよ」

「私と喋るのが怖い？」

「あの子は、そういう子なの。上手く喋れなかったらどうしよう、だとか、そういう余計なことを考えてしまうタイプなのよ。失敗を凄く気にする子なの」

「そんなタマには見えなかったけど」

「人は見かけによらないものよ。それにあの子は電話が嫌いなの。私もそうだから分かるけど、苦手な人にとって、電話って怖いもの

よ」

「んー、まあ、分らくもないかな」

「何にせよ、あとは彼女任せにしたらどうかしら。あんまりコールするのは、逆効果だと思うわよ」

「うん、分かった。そうする」

花梨はそう言って、携帯電話をそつと折りたたんだ。掛かってきますようにと願いを込めて、電話の白い背中を優しくこすった。

それから四時間あまりが過ぎた。叔母は寝室に戻ってしまったが、花梨は何となく寝付けずにダイニングにある椅子に腰をかけた。もう十二時が近い。こんな時間に掛かってくるなどと期待してはいなかったが、花梨はまだ電話を握っていた。

せつかく貸してもらったんだし、朝になったらママに掛けてみようかな。花梨はそう思った。でもやっぱり、わざわざママと話す理由は見つからない。特別なことがあったわけでもないし、あったとしても家に帰ってから話せばいいだけなのだ。友達の家にかけてうか？ 用件もないのに何を。天気予報でも訊く？ ううん、バカバカしい。

携帯電話が輝かしい光を放ってメロディを鳴らしたのは、そんなことを考えているときであった。花梨の心臓は跳ね上がった。ただ、そのメロディは、短く一度だけ鳴って止まってしまった。花梨は、折りたたみ式のそれを開き、画面をみた。

どうということなのかは、すぐに分かった。画面をみると“メール一件”の文字が表示されていたからだ。もちろん、花梨はメールがどのような機能であるのかを知っていた。直接、話すのではなく、文字を送って意思疎通をする機能だ。言わば機械で行う文通である。花梨は、ドキドキしながらボタンを押した。

“起きてる？”

たったの四文字だった。クエッションマークを含んでも五文字。送り主は三坂怜亜と表示されていた。

どうしよう。花梨は困惑した。メールが送られてきたのだから、

メールで返すべきなのだろうか。だけど、花梨はメール機能を使ったことがない。時間を費やせばできる自信はあるが、ただでさえ夜中なのだ。そんな悠長なことはしてられない。

だとすれば、やはり通話するしかない。花梨はもはや馴れてしまった操作を行い彼女に電話をした。

コール音は2回だった。そこでコールが止まったのだ。電話がつながったときだけに起こる独特の音が花梨の耳に入ってきた。こうして二つの空間は、携帯電話という文明の利器によってつながれたのだ。

「はい」

落ち着いた声が、花梨の耳に入ってきた。いや、落ち着いているだけではない。書き表せば、たった二文字に過ぎないその言葉の中にさえ、彼女の個性は現れていた。気取ったような声だったのだ。

「あ、あの。もしもし！」花梨も声を出した。「えっと、三坂怜亜さん……ですよね？」

「違うつて言ったら？」

「えっ？」

「……冗談よ。私が三坂怜亜。リラ先生から私のことを聞いて、お礼をするために掛けてきた。そんなトコでしょう？」

その一言で、花梨の気はとても楽になった。なんだ全部、お見通しのわけか。さすがに、人を子馬鹿にするだけのことはあって、物分りがいいらしい。

「あ、うん。さっきはどうもありがとう。もう一度、お礼を言っておくね」

「どういたしまして。用件はそれだけ？　だったら切るわよ」

「えっ、ちよっと待って。いくらなんでも早すぎるでしょ。もう少しぐらい喋ろうよ」

「喋るって何を？」

花梨は狼狽した。当たり前だけど、他人は自分の都合通りには動いてくれない。

「せっかくリラ叔母さんっていう共通で見知っている人がいるんだからさ、だから……」

「悪いけど、私、電話で話すのが嫌いな。お喋りがしたいのなら、誰か他の人に頼みなさいな」

「電話が嫌いなら。直接、会って話そうよ」

「はあ？」

そこで花梨は自分の提案を打ち明けた。ちゃんとしたお礼がしたいから、明日、お礼の品を持って会いに行ってもいいか、と尋ねたのだ。もちろん彼女は断わったが、花梨は執拗に食い下がった。花梨が本気であるということを彼女に分かってもらえるように、好きなお菓子の種類を問いただすなど、より具体性のあることを話した。五分ほど説得してみると、花梨はまずまずの手ごたえを感じていた。「分からないわね。どうして、そこまで私に会いたがるの？ さては、あの人に何かを吹き込まれたわね」

「あの人がってリラ叔母さんのこと？ ううん、違うよ。叔母さんは関係ない」

「だったら、どうして？」

「私、動き回ってないと死んじゃうから」

「だとすれば、私じゃなく医者の方に行くべきね」

「もう行ったよ。手遅れだって言われた。まあ、それはともかく、ようするに私、すっごく暇なの。ママは夏休みが終わるまで、迎えに来てくれないし」

「つまり私は、暇つぶしの道具ってわけか」

「ご、ごめん。そういうつもりじゃなくて……」

「いいのよ、別に。むしろ、正直に話してくれて嬉しいわ。私、礼儀や気遣いなんて大嫌いだからね。……気に入ったわ」

「えっ？」

「あなたの望むとおりにしてあげるって言ったの」

「ほんとに？ ありがとう！」

花梨は、電話を持っていない方の手でガッツポーズをした。とう

とう約束を取り付けた。最初は望み薄だったが、意外に何とかなるものだ。

それから花梨は、相手の都合を訊き、会う時間帯を決めた。遅い時間帯の方が都合が良いと彼女が言ったので、明日の夕方ごろに会うことになった。いよいよ何もかもが決まり、花梨は充実した感触を味わっていた。

「じゃあ、明日の午後四時に、会いに行くね」

「もう十二時を回っているから、正確に言えば今日の午後、四時ね」

「あつ、うん。そういうことになるね」

「お土産を忘れないでね。私の好物はチーズケーキよ。モンブランは絶対にダメなんだから。飲み物は家にある大丈夫。お子様はオンラインジューズでいいでしょ？」

「何でもオーケーよ。アルコール以外なら。じゃあ、明日ね。ちゃんと家にいてよ」

「リラ先生よろしく」

そこで通話は終わった。花梨は安堵の息を吐いた。最初はどうなるかと思ったが、結果的には大成功だったといえよう。何にせよ、これで繋がっていた糸がパイプになったわけだ。安心したら、急に眠気が出てきた。

明日に備えて寝室に戻ろうとしたとき、再び携帯電話が輝いてメロディが流れた。花梨は、素早くそれをとって画面をみた。メールが届いていることが表示されていた。ボタンを押して確認する。

“ 秘密をばらします ”

5 呼称

翌朝の花梨の起床時間は、いつもよりも三時間も遅かった。就寝が三時間遅れたから当然といえば当然かもしれない。

“ 帰りは七時ぐらいになると思います。出かけるときは鍵をかけてください。冷蔵庫に回鍋肉。彼女によろしく ”

ダイニングにある大きな木製テーブルの上に、叔母の書き置きがあった。仕事に出かけたようだった。彼女というのは、もちろん三坂怜亜のことだろう。その彼女のことで訊きたいことがあったのにな、と花梨は叔母がいないことを残念に思った。

花梨は、ゆっくり時間を使って身支度を済ませた。ご飯に回鍋肉を乗せて食べ、お風呂場で体を念入りに洗い、新しい服（叔母さんに買ってもらったやつ）に着替えた。

それから近場の洋菓子店に行つて、チーズケーキを2つ購入した。二十分たらずで家に戻つてきて、冷蔵庫にケーキをしまった。これで全ての仕度が終了。あとは時間になるのを待つだけだ。

「あと四時間か」

花梨は、ベッドに仰向けに倒れて天井を見上げた。携帯電話を開いてメールの受信箱を見る。

“ 秘密をばらします ”

花梨は、そのメッセージを長いあいだ見つめた。一体、どういう意味だろう。

タイミングから考えれば、これは花梨に宛てられたメールに違いない。普通に考えれば、花梨に対して何らかの秘密を明かすということだろう。

問題は、これが通話の後に送られてきたメールだということだ。彼女は何か、わざわざメールでこの文章を打ったのだろうか？ 口で話せば済むことだったのに。通話の後に、たまたま思い出したのだ

ろうか？　あるいは文字として残したかったのだろうか。メールは消去することもできるけど、逆にいえばそれをしなければ残り続ける。そうすれば、このメール文は、叔母も見ることになる。

多分、彼女はそれなりに大きな秘密を握っているのではないだろうか。そう花梨は予想した。ただの思わせぶりや小事であるとは考えにくい。それは花梨が抱いている彼女のイメージと合致しない。彼女がそんなことをするとは思わない。

だけど、それ以上に分かることはない。推理の材料が集まっていないから、予測や予想はできても裏づけがとれない。想像の通りになるのか、それとも考えつかないようなことが起きるのだろうか。彼女は秘密をばらすというが、花梨から見れば、彼女の全てが秘密だともいえる。未知の場所に踏み込み、未知の人と出会う。なかなかの冒険だ。

花梨の胸が高鳴っていた。そのときの花梨は、自分の気を静めたのか、あるいはそうでないのかが分からなかった。だが、少なくとも悪い気分ではなかった。完全にイニシアチブをとられているが、それこそ花梨が望んでいることだ。こういうスリルは、何ものにも代え難い。

彼女と再会することで頭がいっぱいで、他のことには手がつけられなかった。時間があるので読書をしようと試みたが、文字が頭の中に入るだけで、その意味まではとどがなかった。家の中をうろつき回ったり、顔を洗ったり、冷蔵庫を物色したりした。

時間の進みは遅かった。なんとか約束時間の一時間前まで持ちこたえると、花梨は、とうとう我慢をするのをやめた。携帯電話を取り出し、彼女を呼び出したのだ。今回は比較的早く通話できる状態になった。

「まだ早いけど、会いに行ってもいい？　私、待つのが苦手です。あっ、そうそう。叔母さんが出かけちゃったから場所が分からないの。場所を教えてください。」

口で説明する方が面倒だということで、花梨たちは互いが知って

いる場所で落ち合うことにした。昨日の川原だ。花梨は冷蔵庫からケーキの箱が入った茶色のビニール袋を掴み、嬉々として家を飛び出した。

五分も経つと、花梨はすでに川原に着いていた。以前と変わりなく川は飛沫を立てて流れていた。彼女はまだ来ていなかったが、花梨はかなり急ぎ足で来たので当然だろう。

彼女は何処からやって来るのだろうか。と花梨は考えた。昨日のように川の対岸からだろうか。もしそうであったのなら、今日も同じことをやってみてよ、とか言ってみようか。そうしたらきっと、今日はあなたがやりなさいよ、などと彼女は言い返すだろう。その次は……

花梨が、そんな空想に耽っているときだった。突然、何者かが花梨の右肩に触れた。花梨の心臓は跳ね上がり、体を翻して地面に倒れこんだ。その際に、右の手のひらを強く擦り、軽い痛みが走った。「あら、どうしたの？」

花梨は、擦りむいた手をもう片方の手でなでながら、気を落ち着かせようと呼吸をした。後方にいたのは三坂怜亜、その人だった。しかし……

「いま、いきなり現れなかった？」

「はあ？」

「だって……だって、いま……」

花梨は、寸前の記憶を手繰り寄せようとした。十秒ほど前のことだ。周りには誰もいなかった。いなかったはずだ。それが十秒前だ。「意味、分かんないわね」彼女は、長い髪を掻き上げながら言った。「普通に歩いてきただけよ。一体、何を言ってるの？」

花梨は何とか気を取り直そうとした。確かにそばに木々があり、そこに隠れることはできる。きっと、上手く花梨の不意をついたのだろう。だが、何かが腑に落ちなかった。

「足音がしなかったような……」

「聴こえなかっただけでしょ。何か考え事でもしてたんじゃない？」

「そりゃあ、そうだけど……」花梨は記憶を辿ろうとした。考え事。確かにしていたかもしれない。「いいえ……。いきなり驚いたりしてごめんなさい」

「全くよ。むしろそんなに驚かれて逆にこっちが驚いたわさ」

「ほんと、ごめんなさい。私、ぼーとしていたのかな？」

「もういいわよ。私も悪かったわ。肩に手を置く前に一声かけるべきだった。さつ、早く行きましょ」

彼女の口調や振る舞いには何の不自然さもなかった。むしろ、花梨が驚いている理由が分からない、そんな態であった。花梨は、いつもの調子をなかなか取り戻せなかった。不思議なこともあるものだ。そんなすぐに外側への意識が途絶えるものだろうか。

「あの人……、リラ先生は、何か言ってた？」先頭を歩きながら、彼女が言った。石だらけで歩きにくい道だったが、彼女の方は慣れているようで、すいすいと歩いて行く。「私の悪口とか言い触らしてたんじゃない？　あなたの方も色々と詮索したんじゃないかって？」

「そりゃあ、まあ、話の種にはしたよ」花梨は、急ぎ足で、かつ転ばないように注意しながら彼女についていく。「あまり詳しいことは訊けなかったけど、名前とか、もともと叔母さんの教え子だったってことぐらいは。えーと……三坂怜亜さん、ですよ？　なんて呼べばいいですか？」

「何でいきなり、敬語チックなのよ」彼女は呆れたような声で言った。「好きなように呼んでくれればいいわ。さんづけは勘弁願いたいけどね。あと、苗字で呼ぶのも止めて。この辺り、おんなじ三坂って苗字ばかりで、それがすごく嫌なの」

「好きなように、と言うわりに条件が多くない？　年齢差を考えれば、怜亜さんって呼ぶのが自然だと思うけど」

「なに言ってるんのよ。ずっとため口で話してるくせに。なんなら呼び捨てしてくれても構わないのよ」

「それは、さすがにできないよ」

「どうして？」

「そんなの当たり前じゃない。だって多分、私より三つぐらい年上でしょ？」

「歳がどうしたって言うのよ」彼女は、ため息交じりの声で言った「そういうことに捉われているから、みんなバカなのよ。……うん、決めた。その方が面白そうだわ。さっきの言葉は訂正。呼び捨て以外では、受け付けないわ」

「本気で言ってるの？」

「本気も本気よ。逆に訊くけど、どうして年上を呼び捨ててはいけないの？」

花梨は、歩きながら考えた。当たり前だから、それが普通だから。そんなのは、もちろん答えになっていない。バカだと言われても仕方ないほどだ。花梨が逆の立場でも、そう思っただろう。

「絶対にダメだと言うわけじゃないけど……」花梨は慎重に言葉を選んだ。「でも、そっちは本当にいいの？ 私、まだ十一歳なのよ？」

「私だって、まだ十五歳よ」

「四つも年上じゃない」

「あつそ。じゃあ、もういいわよ。好きにしたら？」

そんな言い方しなくてもいいじゃない、と花梨は言いそうになつて言葉を飲み込んだ。彼女の口が悪いことは百も承知だったはず。喧嘩するメリットもない。

「怜亜……、ううん、やっぱり無理よ。まだ、知り合って間もないんだもの」

「あら、できたじゃない。その調子よ。慣れればどうってことないわよ、きっと」

「そうかなあ？」

「そうよ。ふふ、面白い」

「もう。人を使って遊ばないでよ」

その時から、花梨の中で、彼女＝怜亜になった。初めのうちは、やはり抵抗があった。習慣というものが、人をどれだけ縛っている

かということを知った。同時にまた、言葉を変えたときに変化するのは言葉だけでないということにも気がついた。実際、彼女を呼び捨てているうちに、彼女が年上だという事実は、意識の中から薄れていくことになったのだ。

「何をしてるの？ 置いていくわよ？」

肩越しに振り返って、怜亜はいつもの気取った声でそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4201y/>

逆幽霊

2011年11月26日20時52分発行